学校法人 松翠学園
滋賀文教短期大学
SHIGA BUNKYO JUNIOR COLLEGE

保護者とのコミュニケーション意欲を高める授業展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤本, 明美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32125/00000100

保護者とのコミュニケーション意欲を高める授業展開

藤本　明美

抄録：

短期大学の保育者養成校において、学生が保護者とコミュニケーションする意欲を高め、保護者と共に子どもの成長を喜ぶことができる保育者となることを目的とした保育者論の授業展開の実践研究である。

実習やインターンシップ、ボランティアなどで保護者とコミュニケーションをとる経験を持つことがない学生は83%おり、保護者との関わりはイメージとして持っているに過ぎない。また多くの学生が「保護者とコミュニケーションをとることに自信がない」「大人と話すのは苦手」「保護者対応は先輩保育士にまかせたい」という声が寄せられている。このような現状の中、学生が保護者とコミュニケーションをとる体験ができる仕組みがないことを課題と捉えて保育者論の授業の中で実践した。

実習先のクラス担任になったつもりでクラスだよりを書き、それを活用して模擬懇談会をグループロールプレイングで行った。全員が保育者と保護者役を体験し、それぞれフィードバックを行ったり、他者のモデルを複数回見た。アンケートや振り返りシートを分析して保護者とのコミュニケーションに意欲的になることが可能なのか検証した結果、効果が大きく見られた。保護者とのかかわりにおいて苦手意識や不安感が大きかった学生たちが授業を通して意欲を持ち専門性を得ていたことが明らかになった。

キーワード：保護者支援　模擬懇談会　クラスだより　ロールプレイ　コミュニケーション　保育者養成校

1．はじめに

平成15（2003）年２月全国保育士会が採択した「全国保育士会倫理綱領」第３の条文では「子どもと保護者のおかれた状況や意向を受けとめ、保護者とより良い協力関係を築きながら、子どもの育ちや子育てを支え」さらに第７の条文では「地域の人々や関係機関とともに子育てを支援し、そのネットワークにより、地域で子どもを育てる環境づくりに努める」ことを謳っている。同年11月施行された児童福祉法第18条の４において保育士は、「専門的知識及び技術をもつて、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう」と定めた。その後、保育所保育指針は改定を重ね2018年、保育士は子どもの最善の利益を念頭におきながら、保護者の養育力が向上し、各家庭において安定した親子関係が築かれることを目指していくことが強調されている。第４章子育て支援では、「保護者に対する子育て支援に当たっては、保育士等が保護者と連携して子どもの育ちを支える視点をもって、子どもの育ちの姿とその意味を保護者に丁寧に伝え、子どもの育ちを保護者と共に喜び合うこと」としている。

これらの改定の経緯を踏まえ、保育者養成課程においても子どもの育ちや家庭支援の専門的知識や技術向上の重要性が増している。短期大学の学生は２年間で子育て家庭を取り巻く社会の背景や実態、家庭との連携、地域の子育て支援、保護者の気持ちを受け止めながら子育てに関する相談、助言、行動見本の提示などの援助の知識及び技術などを「子育て支援」「子ども家庭福祉」「子ども家庭支援論」「保育者論」「子どもの理解と援助」などの教科を通して包括的に学修するようにカリキュラムが組まれている。しかし、保育実習で子どもとの生活や活動を通して保育を実践的に学ぶように、保護者と実際に関わる体験を意図的に組み込んだカリキュラムはない。また、模擬保育の授業実践論文は多数見られるが、保

護者と子どもの情報共有できる方法の一つである懇談会の模擬実践は見当たらない。筆者が担当する家庭支援論とも連動させながら、保育者論の授業において「クラスだより」を用いた模擬懇談会の実践を試みた。

本稿の目的は、子どもたちの姿を保護者に伝える「クラスだより」を作成する体験と模擬懇談会のロールプレイを通して、学生が保護者とのコミュニケーションの意欲を高めることが可能なのか、授業実践で検証することとしたものである。

２.「保育者論」の授業デザイン

２- １　授業実施状況

2021 年９月～ 12 月に 15 回開講中のうち、９～ 11 回目において実施した授業を研究対象とする。すべての学生が保育実習を終えている時期に実施した。保育者養成校の短期大学２年生の保育者論を受講している 40 名に対面にて授業を実施した。

２- ２　研究の方法

「クラスだより」作成と「模擬懇談会」を終えた時点で得たアンケート結果から授業の成果を定量的に把握する。そして、自由記述で記載された学びの成果に関する記述を８つの項目にカテゴリー化し全体の傾向を質的に把握する。それらの結果を学生に対してどのようなアプローチによって「保護者とのコミュニケーションに意欲を高めることが可能なのか」とう視点から分析し、今後の改善の手がかりを探る。

２- ３　授業の全体概要

保育者論の授業では、以下の３点を目標に掲げている。

①保育者の役割と倫理について理解する

②保育者の資質能力および専門性のありかたについて考える視点と実践力を身につける

③学び続ける保育者になるため語り合いと学び合いのキャリア形成について理解する

表１．に示すように、１～５回目に自分自身の日常生活や集団の中での行動パターン、資質能力、保育観について内省を深めるために他者との対話を通して自己覚知を促した。５回目には他者とコミュニケーションをとる言語伝達の技術を高める演習、６回目には保育者の役割と倫理の自覚を促すために「保育所・認定こども園における人権擁護のためのセルフチェック」（2018）を通して保育者としての人権意識を高めた。７～８回目には子どもや保護者、保育者、地域住民など他者とのコミュニケーションにおいて感情をコントロールする方法やアサーティブな伝え方ができる技術を高めた。９～ 11 回目は本稿の目的にあたる部分であり後ほど論述する。12 ～ 14 回目には、さらにコミュニケーション力を高めるために、保護者と出会う送迎時や電話での対応、職員会議、保護者同士の交流など、具体的な場面で保育者が配慮することをロールプレイで学んだ。そして最後に他者との向き合いで基本となるストレングス視点について学んで 15 回目を締めくくった。

この中で、本稿で論じる授業は、９～ 11 回目「保護者や家庭と共に歩む仕事」をアクティブラーニング型で実施した内容を対象とする。

表１　保育者論シラバス

<table>
<tr><th>回</th><th>内容</th><th>ねらい</th></tr>
<tr><td>1</td><td>学び合えるグループワークを進めるためコミュニケーションについてグループ討議</td><td rowspan="5">〈保育者としての自己覚知〉
自身の日常生活や集団の中での行動パターン、資質能力、保育観について内省を深めるために他者との対話を通して、自己覚知を促す。</td></tr>
<tr><td>2</td><td>自分を知るための My マップ作成</td></tr>
<tr><td>3</td><td>魅力的な保育者とは</td></tr>
<tr><td>4</td><td>保育者としての省察①保育観に気づく（グループワーク）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">5</td><td rowspan="2">保育者としての省察②保育観を見つめなおす
ミスコミュニケーションの体験</td></tr>
<tr><td>〈言語伝達〉
言葉で的確に伝える技術を高める。</td></tr>
<tr><td>6</td><td>子どもの最善の利益を尊重する保育者／
教材「保育所・認定こども園等における人権擁護のためのセルフチェックリスト」（全国保育士会）</td><td>〈保育者の役割と倫理〉
「保育所・認定こども園における人権擁護のためのセルフチェック」（2018・全国保育士会）を通して保育者としての人権意識を高める</td></tr>
<tr><td>7</td><td>保育者の感情のコントロール①コントロールされない怒りによる子どもへの影響</td><td rowspan="2">〈感情労働のコントロール〉
子ども、保護者、保育者同士の関わりで必要に応じてアサーティブな伝え方ができる技術を高める</td></tr>
<tr><td>8</td><td>保育者の感情のコントロール②アサーティブな伝え方</td></tr>
<tr><td>9</td><td>保護者や家庭とともに歩む仕事①子どもの活動を伝えるためのクラスだより作成</td><td rowspan="3">〈保護者との連携〉
本稿において詳細を記載</td></tr>
<tr><td>10</td><td>保護者や家庭とともに歩む仕事②保護者会を円滑に進めるために</td></tr>
<tr><td>11</td><td>保護者や家庭とともに歩む仕事③模擬懇談会</td></tr>
<tr><td>12</td><td>保育者に求められるコミュニケーションスキルアップ①保護者への対応　　／教材「保育者論／渡辺桜編／みらい」「保育内容などの自己評価」日本保育協会</td><td rowspan="3">〈子どもの最善の利益のためにコミュニケーション力を高める〉
送迎時や電話での対応、職員会議、保護者同士の交流など、具体的な場面で保育者が配慮することをロールプレイを通して学ぶ。</td></tr>
<tr><td>13</td><td>保育者に求められるコミュニケーションスキルアップ②職員会議　　／教材「保育者論／渡辺桜編／みらい」</td></tr>
<tr><td>14</td><td>保育者に求められるコミュニケーションスキルアップ③促進の技術を使った保護者交流会</td></tr>
<tr><td>15</td><td>ストレングス視点で他者とかかわる
授業の振り返りとまとめ</td><td>〈ストレングス視点〉
すべての保護者が良い親になりたいという願いをもち、それぞれの強みや健康な資源をもってると保育者が信じて向き合うことを学ぶ。保護者のみならず、子どもも保育者同士にも使う視点。</td></tr>
</table>

2-4　クラスだよりの作成

保育実習期間中に配属となったクラスの担任となったつもりで保育や子どもの姿を思い起こし、保護者向けの「クラスだより」として作成した（写真１）。保育所では、毎日の送迎時に保護者全員と言葉を交わすことは難しい。クラスだよりは保育所と家庭をつなぐ大切なコミュニケーションツールの一つとなる。子どもたちの生き生きとした様子や園として

の方針や担任の思いを細やかに伝えることで、保育目標や活動の誤解を予防し、保護者の不安を軽減でき、信頼関係の構築にもつながる効果がある。

手順としては、見本となるクラスだよりを提示しながら記載する内容の説明を行った。発行日（実習期間中の日付）、保護者への挨拶（担任の思い）、保育・子どもの様子（責任実習時のエピソードなど）、子どもが夢中になって遊んでいること、行事に向かっての活動があればその様子及び行事予定、保護者へのお願い、クラスで取り組んでいる手遊びや子どもたちのお気に入りの絵本の紹介などを記載する。特に次の点を留意して書くことを指示した。

①エピソードは保護者が場面を想像できるよう具体的に書き、子どもたちは遊びや活動を通してどのような学びや育ちがあるのかを伝える。②行事などに向かう活動があれば、当日までの一人一人の変化やクラス集団での助け合う姿などプロセスを伝え、保護者が自分の子どもだけではなくクラス集団にも関心を持てる機会となるようにする。③保育者がどのような願いや思いで子どもにかかわっているのかを伝える。保育者の人柄がわかることで安心や信頼につながる。④読みやすいレイアウト、わかりやすい文章を心がけ、読んでもらえるようにする。⑤誤字・脱字は要チェックする。

写真１．学生が作成したクラスだより

２-５　懇談会の進行について

クラスだよりを活用して模擬懇談会を担任としておこなうための留意点と保護者が安心して参加、交流できる場づくりについて講義した。懇談会の進め方は①保護者の興味関心の高いであろうことから話を始める。②保育者の話し方は、相手に聞き取りやすく、丁寧であることが基本。③保護者の立場に立って、５Ｗ２Ｈを意識してわかりやすい内容や言葉を選ぶ。④大事な部分はゆっくりと、悲しい話は悲しく、楽しい話は楽しく、言葉に表情をつけて思いを伝える。⑤説明の部分には、視覚的な補助を使うと効果的⑥保護者同士の集まりが苦手な方もおられることを留意する。などについて説明した。

保護者が居心地のよい雰囲気のなかで､参加して良かったなと思える場づくりについては､実際に体験を通して学び合った。保育室で行う場合には子どもの様子を紹介できるように作品や遊びのコーナーなど環境づくりも可能だが、講義室で行うため、椅子や机についての並べ方についてグループで考えるよう指示した。

また、保護者同士で気軽に話せる関係をつくることが、子育ての喜びにもつながっていくと保育所保育指針にも示されている。保育者からの一方的な情報伝達に終始すればせっかくの交流のチャンスを失ってしまうため、プログラムに保護者がお互いを知ることができるように自己紹介を兼ねたアイスブレイクや、家庭での様子を情報交換することを意識的にいれる工夫が、保護者同士や保育者と保護者の気軽に話せる関係づくりに有効である。そのことを体感できるように筆者が地域の親子交流会で行って参加しづらい人を生まない安定的なアイスブレイクを授業で紹介した。

まず、２人という最小単位の人と名前を伝え合い、決められた質問内容で自己紹介を行う。質問内容は誰でも簡単に答えられるような、例えば「子どもの名前の由来」「子どもの好きなあそび」「自分の好きなこと」など紹介し合う。２人の情報を今度は４人組になって、新たなメンバーに聞いた情報を「他己紹介」し合う。このパターンでペアや題材を変えながら行うことで知り合いができる安心を感じることができる。

子どもも一緒に行う場合には、音楽に合わせて歩き、音楽が止まったときに指定された人数で素早くグループを作ると

いう「ナンバーコール」形式のゲームを紹介した。集まった数のメンバーで簡単な質問を出し、そのテーマで自己紹介を行って交流ができるようにする。全員が話し終わったタイミングで、また音楽に合わせて歩き始め、同様のことを繰り返すが、同じグループになったことがない人同士が意識的に集まれるように促すとより多様な親子が交流できる。

３つ目にフルーツバスケットと同じルールの「なんでもバスケット」を紹介した。保護者対象で行う時には、子育てで起きる日常のあるあるのネタを入れるなどの工夫で、保護者同士の交流や情報交換、仲間意識につながる。授業においては学生のあるあるネタで体験した。

４つ目に紹介した「仲間集め」も保護者同士の自己紹介型の交流である。例えば、「同じ血液型集まれ」「同じ小学校区集まれ」「同じお誕生月集まれ（子ども・保護者）」など、同じ共通点を持っている保護者同士が出会えるアイスブレイクである。集まった保護者同士で交流するのも良い。

次回の模擬懇談会の授業ではアイスブレイクを行う時間の余裕は取れないが、こういった場づくりを行った前提で進めることとした。

２-６　模擬懇談会の実施

写真２．模擬懇談会の様子

模擬保育のように計画を立てて具体的に実践する手立てを見つけることは難しいため、実習中に担当したクラスの保育を思い起こし、そのクラス担任になったつもりで模擬懇談会を行うこととした。

模擬懇談会では、保護者に「クラスだより」を配布した。実際の保育現場においては、クラスだよりは保護者とクラスの保育の橋渡しとして

定期的に家庭に配布するものであり、懇談会で配布することを想定しないが、限られた授業回数の中で連動して行った。

保護者同士が自分を安心して出せるような机やいすの配置、お互いを知る時間をもつなどを目指すことで、

①保護者が自分を客観的にながめられる場

②子育てを支えあう仲間を見つけられる場

③さまざまな子どもたちに目を向けるきっかけができる場、となることが望ましい。

和やかな雰囲気の中でリラックスして参加できるための場づくりができるように、保育者自身も節度のある自己紹介を行うことによって保護者も自己開示がしやすくなり、リラックスした雰囲気をつくる。

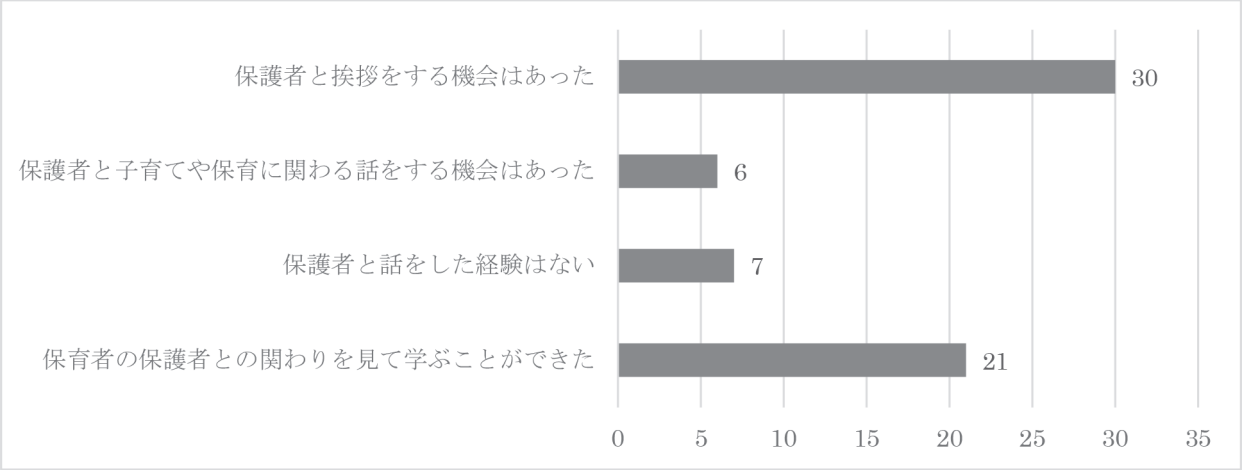
授業の手法として扱ったグループロールプレイングについて説明する。８名のグループに分かれ、保育者役、保護者役を演じ、役割を順次変えながら複数のグループが同時に実施した。それぞれの役割のねらいとしては保育者役は、保護者が保育のねらいや子どもの姿を具体的に理解できるように話す工夫をすることで様々なモデルを得る。保護者役はクラスの学年の保護者として、授業で学んだ保護者がもつ不安を想像しつつ参加しながら応答することを心掛ける。保護者の立場に立って保育者を見ることで視点を広げるように意図した。発表を終えるごとに保護者役で参加した学生全員からどこがどのように良かったのか、どうすればもっとよくなると思うのかフィートバックを受ける時間をとり学びを共有した。

３．結果と考察

３- １　授業実施前の学生

本稿の研究対象学生のアンケート（図１）では、実習やインターンシップ、ボランティアなどで「保護者と挨拶をする機会があった」と回答したのは80％である一方で、「保護者と子育てや保育に関わる話をする機会があった」学生は17.1％であった。つまり83％の学生が、保護者とコミュニケーションをとる経験はない状況となっている。また「保育者の保護者との関わりを見て学ぶことができた」と回答した学生は57.1％であった。さらに、学生からは「保護者とコミュニケーションをとることに自信がない」「大人と話すのは苦手」「保護者対応は先輩保育士にまかせたい」という声が寄せられている。このような現状において学生が保護者とコミュニケーションをとる体験ができる仕組みがない中で、学生が抱える苦手意識や不安を授業の中で解消していく必要がある。

図１．実習やインターンシップでの保護者とのかかわり　N = 37



３- ２　アンケート基本集計の結果

まずクラスだより作成と模擬懇談会を終えた時点で得たアンケート結果から授業の成果を定量的に把握した。そして、自由記述で記載された学びの成果に関する記述を８つの項目にカテゴリー化し全体の傾向を質的に把握する。それらの結果を学生に対してどのようなアプローチによって保護者とのコミュニケーションの意欲を高めることが可能なのかという視点から分析し、今後の改善の手がかりを探る。

クラスだより作成・模擬懇談会を通して学んだことに関する質問に対して「そう思う」と答えた学生は総じて高かった（図２）。特に「クラスだよりを作成する中で、保護者へ子どもの様子を伝える大切さを理解できた」「送迎時などにも保護者に積極的に話しかける努力をしたい」と回答したのはいずれも92％であった。これらは、おたより作成は初めての取り組みであり言葉選びやレイアウトなどに四苦八苦しながらのチャレンジではあったが、保護者と保育を共有することは子どもの育ちの為にも、保護者自身の子育てに取り組む意欲や養育力向上の為にも大切なことであり、理解が深まり成果があったと言える。

授業前は「大人と話すのが苦手」「先輩の保育者に任せたい」という声が多く聞かれたがロールプレイを通して大きな効果がみられた。例えば、「保護者に積極的に話しかける努力をしたいと思った」と回答したのは87％であった。各家庭において安定した親子関係の築きや保育者と保護者が子どもの育ちを共に喜び合う関係性をつくることを願いながら、クラスだよりも日々の送迎時に会えるチャンスを情報共有のツールの一つとして大いに活用してほしい。

保護者同士の良い関係づくりに役立てる力も以下のような結果に表れている。まず「保護者と連携するためには、保育の中で子どもの姿・変容をとらえておくことが大事だと思った」と回答したのは83％。そして「保護者の子育てや子ど

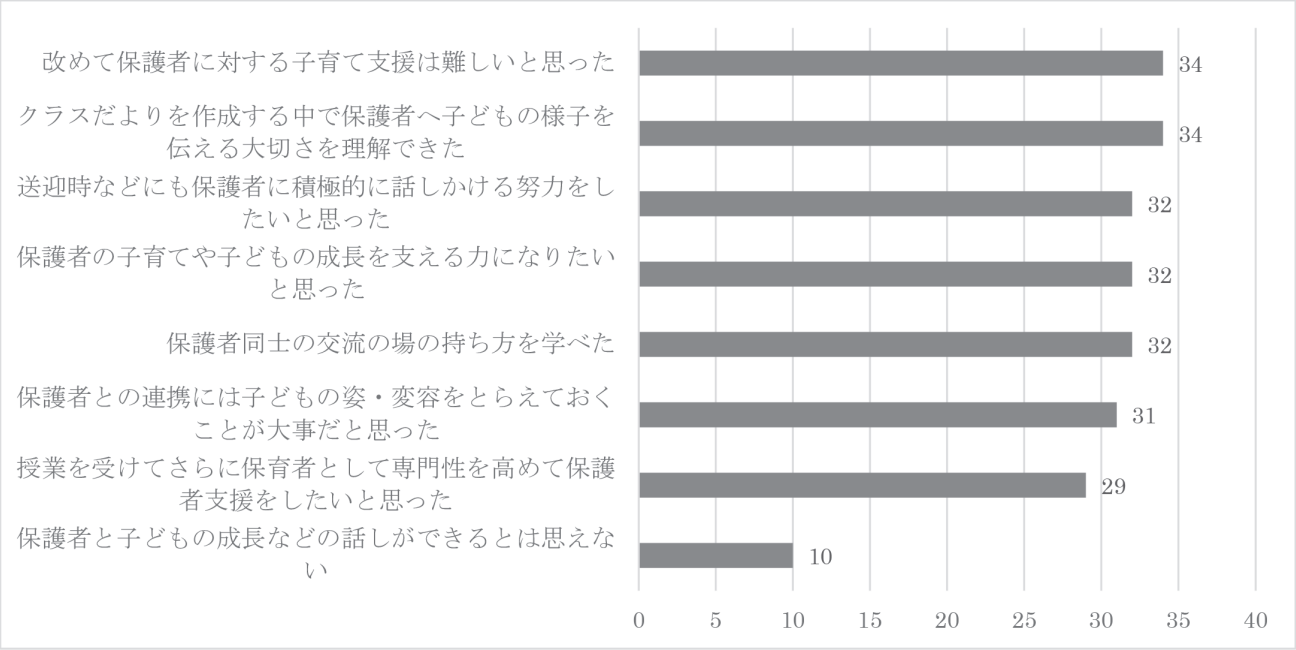
もの成長を支える力になりたいと思った」のは87％であり、保護者にとって子どもの育ちの姿とその変容は非常に関心が高いといえる。保育者が子どもの育ちを支える視点をもって、保育に取り組むことは信頼関係にも関わってくる。保育と保護者支援は連動していることの学びを実感として得たことは、今後の子ども理解や保育の記録の取り方への意識が高まることにつながるであろうと期待が持てる結果であろう。

また、「保護者同士の交流の場の持ち方を学べた」ということに関しては86％が「そう思う」と回答している。これについては自由記述で「アイスブレイクや場の環境づくり、進め方などは新たな学びであり、現場で実践して保護者同士の良い関係づくりに役立てたい」といった記述もみられ実践への繋がりも意識されている。保護者同士がつながることは養育力をあげることにもつながり、重要な専門性であるとされているため、この実践目的にも良い効果がある。

一方で「改めて保護者支援は難しいと思った」という設問へは92％が「そう思う」と回答している。これは保護者との連携の必要性について理解も意欲も高まったが、クラスだより作成の言葉選びや、模擬懇談会を通して、保護者への思いに対応できるのか新たな不安や自己課題に気づくことができたのではないか。この回答は、キャリアアップを重ね学び続ける保育者が求められる中で「授業を受けてさらに保育者として専門性を高めて保護者支援をしたいと思ったか」という質問に対して78％の学生が「そう思う」と回答した背景となっているのではないかと思う。ある一定の経験や学びを授業の中で得ることは可能だが、現場に出てこそ本当の専門性をたかめる日々が始まることを学生も十分認識できたのではないかといえる。

図２．クラスだより作成・模擬懇談会を通して学んだことに関する質問に対して「そう思う」と答えた数値

（「そう思う」項目の複数選択回答可）N = 37



次に、自由記述で記載された学びの成果に関する記述を８つの項目にカテゴリー化し全体の傾向を質的に把握する。それらの結果を学生に対してどのようなアプローチによって「保護者とのコミュニケーションに意欲を高めることが可能なのか」とう視点から分析し、今後の改善の手がかりを探る。

３-３　自由記述の分析

３-３-１　「クラスだより作成」を通しての学びのカテゴリー化

●保護者が関心をもって読みたいと思えるようなクラスだよりを作成するために工夫した

・想像の倍以上に大変だった。この活動で子どもがどのような成長があったのか、保護者に伝わるような言葉選びが難しかった。言葉だけではなく、文字の大きさやフォントを変えたり、レイアウトを見やすくするなど心がけた。

・忙しくても読みたい！読み終わっても残しておきたい！と思える、子どもたちの成長記録のような魅力的なおたよりを目指したいと頑張った。自分では良い出来だと思ったが他の人のおたよりの工夫が学びになった。

・かくれんぼについて書くとき、「かくれんぼをして遊びました」ではなく、「もういいかい、まぁだだよ」と遊んでいるときに聞こえた声（言葉）を書いて読みたくなるように工夫した。

●おたよりや保護者懇談会を通して各家庭において安定した親子関係が築かれるように工夫する専門性

・子どものあそびを詳しく伝えることで、家庭での話題づくりや触れ合う時間につながると思った。

・親子で楽しめる遊びや、園での話題を共有することで、忙しい時間の合間に親子で楽しい時間が過ごしてもらえるようおたよりに書き、懇談会で実際にやってみたら保護者役に好評だった。

●子どもの姿を伝えることで深まる学び

・模擬クラス懇談会を行い、普段の子どもの様子や、家庭では見ることのできない子どもの様子、子どもの可愛らしさや成長してる姿を具体的に伝えていくためには、子どもの日々の姿をしっかりと把握できていないと、保護者には伝えていくことができない事を実感した。

・保護者の方に聞いて欲しい、伝えたいと思うことをピックアップして書くことで、保育の振り返りになった。

・保育のねらいや活動を保護者にわかりやすく書いてみた。計画を上回ったもっともっと子どもの面白い反応を思い起こし、改めて保育の面白さを保護者と共有する意義を感じた。

3-3-2 「模擬懇談会」を通して学んだことのカテゴリー化

模擬保育懇談会をロールプレイで体験することで保護者と情報共有を行うための技術を学んだ振り返りをまとめた。

●話す技術

・保育者が資料を見ずに、保護者の顔をみて手ぶりを加えながら明るく話してくれたら、保育への熱意を感じ、信頼して子どもを預けられるのではと思った。笑顔の大切さを改めて思い知った。

・目を見て話してくれる保育者に対してとても好印象が湧きました。目を見てくれることで向き合ってくれていると感じることができ、保護者役の自分もしっかり話を聞こうという気持ちになった。

・遊んでいる様子を撮った写真を使ったり、子どもの好きな絵本や手遊びなどの紹介をしたりする懇談会では、おたよりだけでは伝わらない日々の子どもの姿などをイメージがしやすくわかりやすかった。

●話す内容

・模擬保護者会で保護者や保育者役を交互にやることで保護者の気持ちや立場になってどんなことを聞きたいか、どんなことを言って貰えるとうれしいのか知ることができました。

・保育者役の方が「子どもの成長を具体的にこんなことがあったんですよ」「こんな風に楽しく遊んでいたんですよ」とエピソードを伝えてくれることで、先生は子どものことをよく見てくれているんだな、成長を一緒に喜んでくれているんだな、と先生の思いが伝わり、子どもを預けることへの安心を感じることができました。

・成長したこと楽しかったことだけでなく、こんなことをやってみたけれどできなかった。これからできるようになるのが楽しみです。と、できないこともあるという現実的な内容を話してくれることで、これからできるようになるのが

楽しみだなとこれからの成長を楽しみに思え、保育者が子どものことをよく見てくれているとさらに感じることができました。

●まなび

・保護者と一緒に子どもを育てていくなかで、保護者とより良い関係を築くことが重要なことであり、大切なことだと学びました。子育てに関して悩んでいたり、自信が持てなくなっていたりしている保護者が気軽に子育ての悩みを相談できるほどの信頼関係が築かれていることや、保護者会などで子どもたちのことや園での取り組みを保護者に知ってもらうこと、子どもを安心して預けられる保育者であると保護者に信頼してもらうことが、保護者との良好な関係を築くうえで大切な視点であると学びました。

・子どもの発達や成長を周りの保育者や保護者と密に共有して、一緒に喜んだり、悩んだり、考えたりして行ける保育者になりたいです。そのためには、普段から周りの保育者と密に情報交換しながら子どもの様子や成長などをたくさん共有して、園の保育者みんなで喜んでいきたいなと強く思いました。

●身についたと思う力とこれからの課題

・授業を通して身についたと思える実践力は保護者とのかかわり方です。保護者懇談会では目を見てあいづちを入れながら話すことを意識したり、場の環境構成によって保護者の方が安心して懇談会に参加し園での子どもの様子を知れたり、保護者同士の交流の大事さも学べた。これからの課題はこの身についた実践力を４月から働いたときに活かすことです。

・懇談会だけではなく、子どもの送り迎えのときに子どもの園での様子や変化をくわしく伝え、園と保護者を連携できる存在になりたいと思った。気になることがあればこまめに報告や相談をして、園全体で保護者の方との信頼関係を築いていきたいです。

・子どもからも保護者からも信頼され寄り添うことできる保育者になりたい。子どもも保護者もコミュニケーションが苦手な人がいると思います。そのため、自分の気持ちを積極的に話すことができなくて、他の子どもや保護者との関わりが築けず困っていることもあると思います。そんな子どもたちや保護者の方が、気軽に話せるように一緒に話をしたり、環境を整えたりなど子どもも保護者も居心地がよい環境を作ることができる保育者になりたいと思います。

・保育者は子どものそばで子どもの成長をとても感じられる仕事だと思うのでその喜びを保護者の方と共有して喜ぶ大切さを実感した。保護者の悩みや不安に寄り添い、気軽に話や相談をしてもらえるよう普段からおはようございます。お疲れ様です。などの声掛けを細やかに行い、コミュニケーションをしっかりとって信頼関係を作っていきたいです。

●自己変容したと思うこと

・今までは子どもに対しての保育や子どもに対しての保育者の姿しか考えていませんでしたが、授業を受けて保護者の存在を知ることが出来ました。保育者として子どもだけでなく保護者とも関わっていく大切さを学ぶことが出来ました。

・保護者と子どもことについてどう伝えてお話をしていけば良いかあまりわからなかったが、今では、保護者にわかりやすいように伝えようとする力が身についたと思う。

・保護者は怖いというイメージがあった。でも、授業で学ぶ中で、悩みや苦労がたくさんあり、日々闘っていると知った。自分が偏見を待っていたと実感し、改めて保育者として意識を高めたいと思った。少しでも不安や悩みを減らせるように、楽しく子どもと関われるように、保護者と関わっていきたいと心から思った。

・保育者は保護者へは子育てへのアドバイスをする立場、保育者は指導する立場だと思っていたが、一緒に子育てをするパートナーの立場だと思えた。一人ひとりの保護者に合わせた関わり方をしたい。

・子どもの発達や保育がついて身につければ保護者と関わることはできるだろうと思っていたが保護者と関わることは奥が深く、学べば学ぶほど難しく４月から不安にもなる。残りの期間と４月の現場に立ってから試行錯誤を繰り返し、保護者支援の技術や関わり方を向上させていきたい。

３-４　考察

以上、保護者とのかかわりにおいて苦手意識や不安感が大きかった学生たちが授業を通して専門性をえていたことがわかる。

ロールプレイで模擬懇談会を実施することで、実習先で保育者が行う保護者への言動を観察することによって培ったイメージや、知識としてインプットした学びは学生自身の力として身についたとは言えない点と、自分にどれくらいのことができる力があるのか課題を見つけることは難しい。その点では、この授業でロールプレイを通じてアウトプットすることで学習効果が向上したといえる。また、保育者としての役割を終えるごとに、保護者役で参加した学生全員からどこがどのように良かったのか、どうすればもっとよくなると思うのかフィートバックを受けることで学びを共有した。自分でも気が付かなかった良い点を確認することで自信につながったり、他者のフィードバックを聞くことで新たな視点を得たりなど双方向の学びができ、個々の課題が具体的に見えたといえる。顔なじみの学友同士のロールプレイでも緊張したという振り返りもあったが、保護者に話すという目的をもって実施したことはメンタルを鍛えることもでき意義を感じた。学生たちは、なれ合いにならないようにそれぞれの役割になりきって取り組んだことを評価したい。

またロールプレイを行った振り返りにおいては、大きく分けて話す技術と内容であった。そして、いずれもその話し方や内容が保護者との信頼関係を築くこととつながるうえで非常に重要なこととして触れていた。ただ、うまく話すことだけではなく、保護者から信頼される保育者になりたいという思いが学びを深めている。他者のモデルを複数回見ることも学びの効果を大きくした。保護者から安心感と信頼感を得る話し方、目線、表情や態度、身振り・手ぶりなどの振舞い、さらに話しの内容や展開の仕方、時間配分など、自分との違いや良いなと思う手法を学ぶことが有効であった。

４．まとめと今後の課題

実習やインターンシップ、ボランティアなどで保護者とコミュニケーションをとる経験は80％の学生が持たず、保護者との関わりはイメージとして持っていたに過ぎない。また多くの学生が「保護者とコミュニケーションをとることに自信がない」「大人と話すのは苦手」「保護者対応は先輩保育士にまかせたい」という声が寄せられている。このような現状の中、学生が保護者とコミュニケーションをとる体験ができる仕組みがないことを課題と捉えてこの実践研究を始めた。

実習中のクラス担任になったつもりでクラスだよりを書き、それを活用して模擬懇談会を保育者と保護者役になったロールプレイの授業実践で、アンケートや振り返りシートを分析して保護者とのコミュニケーションに意欲的になることが可能なのか検証した結果、効果が大きく見られた。保護者とのかかわりにおいて苦手意識や不安感が大きかった学生たちが授業を通して意欲を持ち専門性を得ていたことがわかった。

クラスだよりを作成することで、保護者へ子どもの様子を伝える大切さを理解でき、送迎時などにも保護者に積極的に話しかける努力をすること、自ら積極的に話しかけること、そして保護者の子育てや子どもの成長を支える力になりたいと思ったという点についていずれも90％以上の前向きに捉えている。

また、保護者と連携するためには、保育の中で子どもの姿・変容をとらえておく必要性や保護者同士の交流の場の持ち方を学べたなど、今後の子ども理解や保育の記録の取り方への意識が高まることにつながるであろうと期待が持てる結果である。

実習先で保育者が行う保護者への言動を観察することによって培ったイメージや、知識としてインプットした学びは学生自身の力として身についたとは言えない点と、自分にどれくらいのことができる力があるのか課題を見つけることは難

しい。その点では、この授業でロールプレイを通じてアウトプットすることで学習効果が向上したといえる。また、保育者としての役割を終えるごとに、保護者役で参加した学生全員からどこがどのように良かったのか、どうすればもっとよくなると思うのかフィートバックを受けることで学びを共有した。自分でも気が付かなかった良い点を確認することで自信につながったり、他者のフィードバックを聞くことで新たな視点を得たりなど双方向の学びができ、個々の課題が具体的に見えたといえる。顔なじみの学友同士のロールプレイでも緊張したという振り返りもあったが、保護者に話すという目的をもって話すことはメンタルを鍛えることもでき意義を感じた。学生たちは、なれ合いにならないようにそれぞれの役割になりきって取り組んだことを評価したい。

またロールプレイを行った振り返りにおいては、ただ、うまく話すことだけではなく、保護者から信頼される保育者になりたいという思いがたくさん書かれており深い学びに導かれている。他者のモデルを複数回見ることも学びの効果を大きくした。保護者から安心感と信頼感を得る話し方、目線、表情や態度、身振り・手ぶりなどの振舞い、さらに話しの内容や展開の仕方、時間配分など、自分との違いや良いなと思う手法を学ぶことが有効であった。

今回はグループロールプレイングの手法で保護者とのコミュニケーションに意欲を高めることが可能なのかについてアンケートや自由記述を分析した。その結果、それぞれのアプローチの有効性と具体的にどのように有効であったのかを明らかにすることができた。一方 37％もの学生が「保護者と子どものことを話せると思えない」という自信のなさを呈している。今後は、スモールステップを提示しながらアクティブラーニングを行い、少しずつでも成長している自分を実感できるような工夫を行いたい。

参考文献

渡辺桜編 2018「保育者論 - 保育職の魅力発見！」みらい
社会福祉法人日本保育協会「保育内容等の自己評価」HP
全国保育士会 2018「保育所・認定こども園における人権擁護のためのセルフチェックリスト」HP
高山静子 2019「保育者の関わりの理論と実践」エイデル研究所

藤本明美　子ども学科講師